

細菌検査の結果を地域ネットワークにどう生かすか

◎浮村 聡¹⁾
大阪医科大学附属病院感染対策室¹⁾

日我々は 2012 年に地域の感染制御のレベルアップのための「北摂四医師会感染対策ネットワーク」(70 万人医療圏の主要 26 病院、総計約 4,000 床以上)を立ち上げた。その後 2013 年 12 月ネットワーク内の中小規模の病院にて多剤耐性緑膿菌(MDRP)によるアウトブレイクが発生し、遺伝子検査にて水平伝播であることが確認された。我々ネットワークは保健所の指導の下、依頼を受けた多施設の対策チームが実際の対策を指導、実施し、その成果を評価チームが評価するという体制を構築して、アウトブレイクを収束させることができた。他の事例では遺伝子検査による水平伝播の認識が施設内で共有されることが対策実施のモチベーションに繋がることも実感した。中小規模の病院では、大病院に比べ資源が限られているため、実施および継続可能な対策に制約があり、病院の状況に応じ適切な対策を決める必要がある。また遺伝子的検索の必要な事例においては、より大きな規模の病院でも対応は困難な場合があると推定され、各地域において、専門的な検査の実施可能な施設や行政との連携は重要な課題と考えている。